

展覧会評 上 「第 16 回春陽会展」 報知新聞 昭和十三年四月二十日 (36)

絵の具の濫用  
乱雑な印象の春陽会

木下義謙

木下義謙(きのした よしのり 一八九八年・明治三十一年—一九九六年・平成八年) 和歌山県出身。一水会創立会員、女子美術大学名誉教授。兄孝則も画家。東京高等工業学校機械科卒業。独学で油彩画を始める。第八回二科展に初入選。萬鉄五郎、小林徳三郎等が中心となつて結成した田鳥会に参加。昭和三年渡仏、パリで制作し、サロン・ドートンヌなどに出品。帰朝後二科展に出品。二科会退会后、石井柏亭、安井曾太郎、兄の孝則とともに一水会を結成。戦後は一水会や日展に出品をつづける。女子美術専門学校の教授となる。後に陶芸制作をはじめ、碓伊之助とともに一水会に陶芸部を創設。

国家非常時に日本の美術も孤立へと近づいて来た。日本で他国のものを見る機会が少なくなり、また外国へ出掛けて学ぶことも減つて来た。これが美術界に幸するか不幸となるかは別問題として、何事によらず眼界の狭くなつて来た時は絶えざる反省と特別の努力が必要である。我文化も世界に遅れをとるやうでは大変である。春陽会、国画会の二つの展覧会を見て

時代相を反映してゐる所が見られるかといへば、絵に扱はれた材題として時局物は皆無といつてよい。けれども絵の傾向として西洋人の絵を露骨に真似た絵はほとんど影をひそめた。けれども西洋人に代る日本の先輩の絵を以てただけであり御手本の範囲が狭くなつて来たといへる。かうした時に美術館の必要を益々感じられる。

▽  
国展で今度参考品としてゼンザック、ドラム、ルオーの作品を並べてゐる。これ等がたとひ代表的なものでなくとも、現代の優れた画家の洗練された技術に接し得ることは大変よいことである。絵にしる、また彫刻、工芸何でも眼界は広くあつて欲しいと思ふ。少なくとも現今の日本の文化が広く世界を見渡して、長をとり短を棄て急速の進歩をして来た以上、国粹等といった立派なものが存在して居る性質のものではない。総てを公平に見て自ら改めるに躊躇しない処に日本人の優れた素質があるのでないか。日本の文化が他に学ぶ処がなくなる等といふことは容易に考へられない処である。

▽  
各展覧会の作品について述べよう。春陽会に入つて見る。第一室から見て行つて残る印象は、絵の具の乱舞な盛上げといった展覧画面である。かうして乱暴に絵の具を厚く塗つたからといつて絵の迫力が出ることにものならないし、勇壮な表現が出来るわけでもない。結果はただ未消化なものに

なつてゐる。絵の具は薄かれ厚かれ美しく塗り度いものとは国展の参考品を見ても感じられる。

第一室から第二室に入るといくらか落着いて来る。足立源一郎氏の《春の新高山》が目につく。けれども僕らには映画に出てくる南極の景色と同様、その場所に行けばこんな風なのか知らと思ひ、また山を現地でスケッチするだけでも種々困難があるだらうと連想する。その他、加山四郎氏、伊藤慶之助氏等この室で記憶する。

第三室に入り、中川一政氏の絵がある。非芸術的になつて来てゐる春陽会の中に「絵も芸術品なり」とがんばつてゐる形である。同じ暮色を描いた《入江》二点、描き方組立てがしつかりしてゐる。

第四室には水谷清氏のインドの絵が沢山ある。作品は出来、不出来が甚だしいと思つた。《建物》《インドの市場》《廻廊》と三点並べれば充分代表出来るし立派に見える。

第五室の鳥海青児氏は感覚を持った人と思ふがその絵のマチエールは非常に昏い。《道化》はやや助かつてゐるが、こんなに画面を汚さなくても済みさうに思ふ。多くの出品画の同様な塗り方も、源は鳥海氏あたりから出てゐるのかも知れない。若山為三氏の《少年》がこの室で目についた。

第六室には石井鶴三氏と木村莊八氏の挿画があつた。各々扱つた小説に最も適した素質を持つてゐる。良き挿画家である。両氏とも挿画と並べて油絵を出してゐるが、油絵はお話にならない。【写真は石井鶴三氏のレヴュー】

